



HAL
open science

リヨン東アジア研究所図書館

Miyuki Yamamoto

► **To cite this version:**

Miyuki Yamamoto. リヨン東アジア研究所図書館. Nichifutsu toshokan jôhō kenkyū 日仏図書館情報研究 / Bulletin de la Société franco-japonaise des bibliothécaires et des documentalistes, 1999, 25, pp.30-36. <halshs-00362724>

HAL Id: halshs-00362724

<https://shs.hal.science/halshs-00362724v1>

Submitted on 16 Nov 2016

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

リヨン東アジア研究所図書館

山本みゆき

リヨン東アジア研究所図書館

山本みゆき

Résumé

La création de l'Institut comportait comme condition préalable la reconstitution d'un fonds documentaire de référence indispensable aux activités de recherche en sciences sociales et au développement crédible de relations avec des centres de recherche étrangers de nature comparable.

Rapport d'activité de l'Institut d'Asie Orientale(IAO) en 1996

Cela fait cinq ans que la Bibliothèque de l'IAO a entamé sa mission. Non seulement ses collections augmentent en nombre, mais encore ses collections d'ouvrages rares augmentent en quantité comme en qualité. Cependant, elle demeure gérée comme un petit centre de documentation attaché à un centre de recherche, et n'a actuellement guère la possibilité de s'ouvrir à un plus large public.

Collectionner des documents ne suffit pas: l'avenir de la bibliothèque dépend de l'ouverture de ses portes afin de valoriser son fonds. Jour après jour, les documentalistes s'efforcent d'améliorer l'accueil ainsi que les services envers les usagers.

パリから南へ TGVで2時間。パリ、マルセイユに並ぶ大都市リヨンは、南仏、イタリア、スイス方面への分岐都市としてその名を知られ、特に日本人にはグルメの町として名高い。リヨンの人々は閉鎖的で愛想が悪いというのがフランス人の一般的見解だが、これは余計なことを口にしない気質から来るものらしい。第二次世界大戦中は、そういう口の固いリヨン市民がたくさんのレジスタンを匿ったという。リヨンのレジスタンス活動を記念してできた抗独運動・ユダヤ人強制移送記念歴史センター (Centre d'histoire de la résistance et de la déportation)のある19世紀の建物の一角に東アジア研究所がある。

筆者はドキュメンタリストとして1994年の夏からこの研究所に勤めている。パリ以外にある数少ない日本語図書所蔵機関の一つとして当研究所図書室を紹介させていただくと同時に、ごく限られた利用者だけにしかサービスできない小規模専門図書館の問題点を指摘してみたい。

1) 東アジア研究所 (IAO - Institut d'Asie Orientale)

東アジア研究所 (以下IAO)は、1993年1月にフランス国立科学研究センター (以下CNRS) の地方分散政策の一貫として創立された。これはパリ周辺以外の土地への研究所移転や、新規設立を優先

的に支援する政策で、IAO は現代極東アジア地域の社会科学的研究という、CNRSでも他に類のない研究機関として、地方都市リヨンにその将来を期待されて誕生したわけである。設立に当たってはリヨン第二大学、第三大学の協力も得て、各々の教授連も参加することになった。また、ローヌ・アルプス地方人文科学研究グループ(MRASH - Maison Rhône-Alpes des Sciences de l'Homme 以下 ISH⁽¹⁾)の一翼も担うことで、コンピュータ・ネットワークの開発援助も得ることができた。

IAO は日本、中国、台湾、韓国に関する社会科学分野の調査研究を行っている。所属研究者の専攻でいえば、歴史学、経済学、政治学、法学、地理学、人類学、社会学等と分けることも出来るが、その多くは相互に関わりあった学際的研究活動が中心となっている。また歴史的アプローチといっても近・現代史が中心で、現代東アジアの動向と現代世界との関係に調査・研究の主眼がおかれている。詳しい活動内容は Webサイト⁽²⁾を参照されたい。

常勤メンバーは現在12人、中国専攻5人(CNRS研究員1人、リヨン第二大学教員2人、リヨン第三大学教員2人)、日本専攻7人(CNRS研究員3人、リヨン第二大学教員2人、リヨン第三大学教員2人)となっている。それぞれ中国語、日本語理解に支障のない学者ばかりである。日常的な研究活動に加えて、大学での講義、若手研究者の育成、セミナー、シンポジウムなどの企画や参加と研究者は忙しい。多忙な研究所員が必要とする資料提供を第一の目的として、図書資料室は設置され、1994年からその活動を始めた。

2) IAO 図書館

IAO メンバーの研究活動に便宜を図ることを第一とするものの、当図書館は現代極東アジア関連資料の宝庫になるべき使命も帯びているため、図書室運営に若干の矛盾が生じている。他の大規模な公共図書館では見つからない資料を豊富にそろえていながら、必ずしも万人に開かれた図書館ではないということでせっかくの貴重な資料が宝の持ち腐れになる危険がある。フランス国中から東アジアに関する豊富な資料を求めてやって来る利用者のことを考慮し、当図書館が開かれた資料センターとして機能していかなければならないことを、今後の課題としてまず指摘しておきたい。

2-1) 概要

IAO は築百年を越える建造物の3階と4階の約700㎡をリヨン市から無償で借り受けている。図書室は4階にあり、筆者の仕事部屋は広々とした個室である。しかし、エレベーターがないので、書籍の運搬には不便である。もともとは病院だった建物で、各フロアは鯉の寝床のような縦長廊下の両側に部屋が並んでいる。4階の幾つかの部屋の壁を取り払って4室の大部屋にし、床を補強して手動コンパクト（移動書架）をいれて書庫とした。利用者は一度に一人か二人という前提で、空間を最大限に生かして収納することを優先した。4室は各々、中国語書籍、中国語雑誌、日本語（書籍・雑誌）、欧文（書籍・雑誌）に分かれており、廊下に閲覧席を8席設けてある（マイクロフィルム閲覧用2席、パソコン検索性2席を含む）。コンピュータ目録だけで、カード目録は作成していない。

開設当時 IAOメンバー以外の利用者のことはあまり考慮されず、快適な閲覧場所を設けることはおざなりにされた。学生利用者も増えてくるにつれて、その場しのぎの窮余策で切り抜けてきたが、

外来利用者受け入れ体制の抜本的見直しが必要であろう。

2-2) 利用者

利用者は研究所メンバーと外来者に分けられる。メンバーは週末でも、夜中でも図書室への出入りは自由で、貸し出しカードをドキュメンタリストが分かるように提出して行けばいくらでも本を持ち出せることになっている。

一方外来者には、様々な事情からきわめて閉鎖的である。登録制をとっているが、登録のためには必ず当研究所メンバーの推薦を必要とする。特に大学生は、3年生(学士課程にある者)以上で研究所メンバーの授業を受けたり、メンバーの指導で論文を準備している者に限られている。また、外部の研究者などは研究内容や目的などを示してもらい所長自ら審査を行った上で利用を許可している。

今年度(98年9月～99年6月現在)の登録者内訳は以下のようになっている。

| | |
|------|-----|
| 学士課程 | 12人 |
| 修士課程 | 23人 |
| 博士課程 | 16人 |
| その他 | 2人 |

正式な登録者数は少ないが、例えば学士課程の学生は、学期末、学年末のレポート作成などのために慌てて本図書館に殺到する傾向があり、登録許可をとっている暇がない場合は、利用許可に便宜をはかる場合も多い。登録者の利用頻度はまちまちだが、顔馴染みになる学生は、年間通して10人ぐらいいる。

開設以来、外来者の利用時間は月曜から金曜まで毎日9時～12時、14時～17時、開架式で利用者は自由に閲覧、コピーができる代わりに貸し出しを制限(博士課程の学生のみ可)していた。最近の調査で紛失書がかなりある事が分かり、閉架式に変えてみた。それに伴い、開室時間は午後だけとし、研究所メンバーの推薦がある学生には全員貸し出し可能とした。利用者はコンピュータ目録で希望図書を検索し、ドキュメンタリストが書庫へ本を取りに行く。但し、希望図書がはっきり分かっている場合は、コンピュータ目録の説明をするよりドキュメンタリストが自分で検索したほうが早い。図書館を頻繁に利用する学生には閉架式は評判が悪いが、ドキュメンタリスト二人だけでは入退室者の管理まで目が行き届かない。

リヨン第二大学図書館サービスの協力を得て、盗難防止探知機の導入も検討されてはいるが、実現はまだ先のことであろう。また、探知機が導入できても、一万冊を越えた蔵書全てにマークを入れる大仕事が残っている。こういった問題を開設当初に予め予想し検討できなかったのは、研究所付属の小規模図書室の弱みといえよう。

2-3) 蔵書

図書室設置の基盤になったのは、三千冊を越える中国語資料だった。それを元に、欧文(英語、仏語)日本語、韓国語の資料を増やしていく計画がたてられた。残念ながら、現在のところ韓国研究者はいないため、韓国語図書は購入を見合わせている。

1999年6月現在の蔵書数は大体以下の通りである。

書籍

日本語 3009 + 2000 (パリの研究所から移された政治・法律関係書籍 目録作成中)
 中国語 6163
 韓国語 114
 欧文 5311

雑誌

日本語 88 タイトル (継続購入 43タイトル)
 中国語 384 タイトル (継続購入 180タイトル)
 韓国語 15 タイトル
 欧文 90 タイトル (継続購入 57タイトル)
 (韓国語雑誌は全て寄贈による。)

このほか、地図、マイクロフィルム、ビデオカセットなどは研究所メンバーの要請があれば必要なものを随時購入し保存している。またリヨン第二大学図書館の依頼でマスペロ文庫(約900冊)を所蔵している(fonds Maspero)。これは、アジア学者マスペロ博士の遺族がリヨン第二大学に寄贈したもので、19世紀末から今世紀にかけてのインドシナ、カンボジア、中国などに関する貴重な資料である。今秋には故ガニョン博士の中国語・日本語の歴史や文化に関する蔵書約4000冊を譲り受けることにもなっている(bibliothèque de Guy Gagnon)。

書籍分類は当館独自のもので、大枠は次の通り。

100 番台 社会
 200 番台 政治
 300 番台 法律
 400 番台 経済
 500 番台 地理、都市研究
 600 番台 歴史

各分野は具体的なカテゴリーに分かれ、欧文書はさらにアジア・中国・日本・韓国と関連国別にも分類している。

蔵書は全てコンピュータ目録 Doris-Lorisに入力する。パリ日本文化会館図書館でも使われているソフト⁽³⁾だが、日本語対応はなされておらず、全てローマ字表記となっている。Lorisはリヨン第二大学のサーバーを用いた ISHの共同目録であり、他の幾つかの研究所資料室もデータを入力している。そのため IAOが勝手に独自でソフト開発するわけにはいかず、アジア言語対応はなされていない。ISH 本部では Lorisをインターネットにのせる準備をしており、近い将来ローマ字表記ではあるがインターネット検索が可能になる⁽⁴⁾。

2-4) 職員

図書室業務にたずさわるのは現在のところ筆者と中国人のドキュメンタリストの二人で、CNRSの職員である。中国人の同僚は中国語(中国と台湾)の書籍・定期刊行物の注文管理、及び欧文の中国関係書の目録作成を受け持っている。筆者は日本語と欧文の書籍・定期刊行物の注文管理全般を

担当する。必要に応じて、短期アルバイトの学生を雇用して実務を行っている。中国語書籍目録作成には開設以来、常に中国人学生にアルバイトを頼んできた。

研究者の要請と助言を元に、購入図書を選択し、予算に応じて発注する。届いた書籍をチェックし目録作成後、書庫に収める。定期刊行物はナンバーをチェックするだけで、内容のデータ入力までは手が回らないのが実情である。

外来登録者や、貸し出しの管理も筆者が担当しているが、図書館が閉鎖的なおかげで一人でも何とかなる。門戸解放するとなれば、それなりの人手が必要であり、それが見込めないから閉鎖的にならざるを得ないともいえる。もうひとりドキュメンタリストが雇えるよう CNRS に申請中だが、日本語か中国語、できれば韓国語も分かるような人材が必要で、実現の可能性は高いとは言えない。

フランスでは司書とドキュメンタリストをはっきり区別しており資格体系も違うのだが、当図書館に限っては職名など意味はなく、図書処理事務すべては元より、掃除もすれば、運搬などの力仕事もしなければならない。フランスの小規模図書館は、どこでも実情は似たり寄ったりかと思われる。

2-5) 予算・経理事情

CNRS、リヨン第二大学、リヨン第三大学の予算を使うことができるが、各機関で経理管理方法が異なり複雑をきわめる。どこの公機関も同様だろうが、取り引きできる会社（書店）が各々に決まっており、安いからといって無闇にオンライン注文などはできない。

発注の時点で予め、どこの予算をどれだけ使えるか見積りを立ててリザーブしておかないと、いざ請求書が届いたときに融通できる予算がないということにもなりかねない。次々と注文を急がせる研究員からのプレッシャーを調整しながら、経理担当者との連携プレーが必須となる。

発注先は中国、台湾、日本、イギリス・アメリカ、フランス国内。中国の書籍価格は日本の約3分の1に過ぎない。予算配分は、中国語、日本語、欧文に分けて行い、日本語予算の割合はかなり高いが、それでも購入可能な量は中国語には及ばない。そこで、研究者にも協力してもらい、日本の財団や基金の助成プログラムを調査し、昨年は三つの機関から寄付援助を得た。

以上のように、小規模図書館の運営は容易ではない。資料を保存しておくだけなら問題は少ないだろうが「図書館」である以上、利用者のニーズに応えなければその存在意義は失われてしまう。また、図書館実務にたずさわる者として仕事をしていても空しい。

3) 問題点と今後の課題

3-1) カタログソフトの CJK対応

パリ日本文化会館図書館の様に、開館前からソフトの日本語対応が検討され計画されるのが本来の在り方だが、IAO 設立当時にソフトとして Lorisの共同使用を決め、CJK（中国語、日本語、韓国語）対応の可能性を深く検討しないまま見切り発車してしまった。その後、極東研究所で開発された「アジア⁽⁵⁾」併用を試みたものの、Lorisとの互換性をもたせる計画が立ち消えになり、「アジア」だけに切り換えることもできず、今日に至っている。

「アジア」に限らず、最近は CJK対応ソフトも増えているが、ISH の Lorisと互換性を持たせられなければならない。パリ日本文化会館図書館の Loris日本語対応成功に見られるように、技術的にはいくらでも解決策はあるはずである。ただ、それに必要な予算と労力をどれだけつぎ込めるかが問題となる。

IAO 図書館が現在のまま閉鎖的に所属メンバーの便宜だけを第一にしていくなら、ローマ字表記のみの目録でも十分だと筆者は考えている。一方、インターネットなどで研究所の情報を全世界に提供することを考えれば原語表記は不可欠であろう。

3-2) サービス業務

インターネットの一般化にともない、IAO のホームページも今後改良を重ねて充実させていく計画がある。図書館に関する情報も当然提供するし、Loris ベースの CCOは ISHの管轄で IAOの意向とは関係なく目録は万人にアクセス可能となる。その一方で図書館の門戸が現実にはあまり開かれていないというのは矛盾している。

利用者が研究活動に携わる者だけだとしても、フランス全土、ヨーロッパ各地からも問い合わせがくると考えられる。遠路はるばる訪ねて来る利用者を、紹介状がないからと門前払いするわけにもいきまい。あるいは、リヨンまで来られない人々には、電話やファックスでのサービスの可能性も検討する必要が出てくる。

図書館のドアをどんなに固く閉ざしていても、その情報が世に出るのを食い止めることはできなくなっている。それを情報流出と考えるか、情報提供と考えるかで対応の仕方は変わってくるだろうが、情報の出所としての責任は逃れるわけにはいかない。

おわりに

研究所メンバーとドキュメンタリストの関係は、目下のところ書籍情報の交換にとどまっている。本来なら研究活動に必要な、適切・詳細な資料を収集し再構成して提供することこそドキュメンタリストの仕事だろう。しかしながら、図書館運営に加えて何人ものメンバーの希望に応えることはなかなか難しい。

今後も試行錯誤を重ねながら、研究所メンバーにも外来者にも喜んでもらえるような、利用者の立場に立った図書館づくりを心がけたい。

【注】

- (1) 以前は MRASH - Maison Rhône-Alpes des Sciences de l'Homme と呼ばれていたが1999年1月から ISH - Institut des Sciences de l'Homme と改名した。
- (2) <http://www.ish-lyon.cnrs.fr/iao>
- (3) 豊田透「パリ日本文化会館図書館の概要とコンピュータ・システム」
『日仏学術シンポジウム報告書』(1999) p. 66
- (4) <http://www.ish-lyon.cnrs.fr>
- (5) ユベール・ドラエ「CCOにおける極東文献目録」

『日仏学術シンポジウム報告書』(1999) p. 51

(やまもと みゆき リヨン東アジア研究所)